［論　文］

近代作家の「幼年時代」の捉え方に関する比較研究
－遊びに関する捉え方を中心に－

A Comparetive Study on Perceptions of “Childhood” by Modern Writers
― Dealing Mainly with Children’s Play ―

中　島　賢　介*

要旨

自伝研究の一環として、大正昭和期に活躍した作家6名の幼年期に特化した自伝について執筆動機、執筆年齢、養育者、遊びなどの項目に分類して比較検討を行った。その結果、30代前後で書かれた自伝と60歳代前後に書かれた作品に分けられることが分かった。30代前後の作品は、生計を立てるために書かれ、60代前後の作品は自分の人生を振り返るために書かれたものである。また、30代前後に書かれた作品は、幼年時代の遊びについて遊びの種類や遊び方に関する具体的な記述が見られた。

キーワード： 自伝（Autobiography）／幼年時代（Childhood）／遊び（Children’s Play）

Ⅰ．はじめに

人は自分が生きた証を後世に遺そうとする。その一つが自伝（自叙伝）である。だが、作者側にすれば、自伝を書く理由は一つとは限らない。自分のため、後世のため、あるいは世間のためと、その理由は各自の事情によるものと考えられる。和田（1999）は、フランス文学の主だった作家たちの自伝を比較する試みを行っている。それによれば、ルソーの執筆目的は「自己弁明、独自なる自己の魂の歴史を書くことによる人間の内面研究」であり、シャトーブリアンは「時代を代表する者として自分を語る、自分について自分自身を説明する、後代の誤解を防ぐ」ために執筆し、ジッドは「贖罪（pénitence）のために事実（véridique）のみ」を書いているという。これまでの自伝研究については、ヨーロッパを皮切りに日本を含め世界各国で、各作家の自伝を作品分析の中に入れ込むという形の研究がかなり行われている。しかし、自伝そのものの価値を考える伝統は、我が国には未だ発展途上にあるといってよい。

今回は、自伝研究の一環として、作家の幼年時代に焦点を絞り比較考察を試みる。就学前の「遊び」を中心とした生活が彼らにどの程度まで自覚されたものであったか。そして、彼らの幼年時代の「遊び」に着目することで、遊びの時代性や遊びに対する意識に関する分析を試みたい。

Ⅱ．自伝文学の伝統

自伝（autobiography, autobiographie）は、遡れば４、５世紀のアウグスティヌスの『告白』やルネッサンス期のチェリーニ『自伝』などが挙げられるが、自伝という用語が使用され出したのは19世紀だと考えられている。和田（1999）は、「フランスにおける近代的自伝の創始者は言うまでもなくジャン・ジャック・ルソーである」と明言している。一方、国内における自伝は平安期のいわゆる日記文学や新井白石『折たく柴の記』などが挙げられる。ゆえに、作者が自らの生い立ちを語る自伝は、国内外を問わず、千年以上は遡ることができる文芸ジャンルであるということができる。けれども、自伝という文芸ジャンルが成立する過程においては、19世紀を待たなければならなかったわけである。これは、近代的自我の確立という歴史が大きく影響しているものと考えられる。人間存在の普遍性から人間の個別的な特殊性へと目が向けられるようになったとき、自分自身を語るという行為が注目されるようになる。我が国で自

* NAKAJIMA, Kensuke
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科 国語

伝という言葉が書物の題名として使用されるようになったのも、明治時代後半に出版された福沢諭吉の『福翁自伝』であることからも文学潮流の中に位置づけられるといってよい。だが、国内作家に関する自伝研究はそれほど盛んに行われたわけではない。このような状況を佐伯（1991）は、次のように指摘している。

自伝論、自伝研究というものは、案外乏しいのだ。ぼくの知る限り、日本人の自伝を系統的、総体的にとらえようという仕事は、ほとんどなされていなかったに近い。国文学者の側にも、文芸批評家の側にも、この種の作業は、どうも見当らない。思いがけぬ穴といった形で、また何かの盲点みたいに、すっぽりと抜け落ちている。

また、『日本人の自伝』（1982）を編集した鹿野は、「自伝のうちそと」において、中川（1979）が紹介したルジェンヌの自伝定義に一定の評価を下しながら、自伝編集の意図と蒐集方法を次のように述べている。

（ルジェンヌの定義は）自伝についてのほとんど間然するところのない定義というべきだが、それでも実際に作品を読んでみると、その定義にあてはまるかどうか迷う場合が少なくない。いうまでもなく、定義がまずあってそれにのっとって作品が書かれたのではなく、作品があって定義がそれを追いかけているにすぎないからである。（略）この巻の編集に当ってわたくしが留意したのは、自伝という概念を一個の完結した世界と捉え、その基準にしたがって厳密に取捨することではなく、人生に根ざしてそこから養分をえて吸収している作品と考え、その人生を写しだす表現としての〝自己語り〟の数々に、できるだけ多様なかたちで参加してもらいたいということであった。

以上のことからも、鹿野は、定義を定義として認めながらも定義に縛られない蒐集を行ったということができる。このように、『日本人の自伝』全集が完成し、自伝研究に一つの指標を投げかけたが、佐伯の研究以降、日本文学におけるジャンル論としての自伝研究は依然として多くない。そこで、ジャンル論としての自伝研究の一環として、人生の出発地点ともいえる幼少期に着目し、特に幼年期をどのように過ごしたかを描写を抽出してその特徴を分析した。

Ⅲ．明治後期の作家らによる「幼年時代」

明治中期から後期にかけて誕生した作家の自伝でも、「幼少期」に焦点を当てて綴られた作品はそれほど多くはない。今回取り上げなかった幸田文の『みそっかす』の成立等については、増田（2004）に詳しい論考があるので参照されたい。また、女性作家の自伝についてはジェンダー文学の自伝研究に委ねることにしたい。今回は、作家の出生年順に、中勘助の『銀の匙』、谷崎潤一郎の『幼少時代』、室生犀星の『幼年時代』、堀辰雄の『幼年時代』、井上靖の『幼き日のこと』、そして大岡昇平の『幼年』の六作を取りあげ比較することにした。『銀の匙』以外は、自伝のなかでも著述内容が幼年期に限定されていることが共通した特徴である。「私」という主人公が、それぞれの出生とその後の生活の基盤となる幼年期を過ごしたかを作家自らの手で綴られている。

１．中勘助『銀の匙』

『銀の匙』（1921年、36歳）岩波書店より単行本化されている。前編執筆時（1912）中は27歳であった。この執筆は他の６人と比べ、最も早い。これは、執筆動機にある韻文制作の断念であったことと大きく関連している。岩波文庫のあとがきを担当している和辻哲郎は、次のように述べている。

氏はただ自分自身の世界をのみ守りながら、それをいかにして詩の形に表現しうるかに苦心した。がついに、現代の日本語ではほとんど不可能である長詩を断念して、最初は屈辱をさえ感じながら、散文に筆を執るようになった。その最初のまとまった作品がこの『銀の匙』の前篇なのである。（p.191－192）

だが、この作品は夏目漱石に評価され東京朝日新聞に推薦され掲載される。そして、現在でも岩波文庫の販売ランキングでも上位に入るロングセ

ラー作品の一つである。『銀の匙』における幼年期は、前編53章のうち１章から31章までに描かれている。32章の冒頭が、「そのようにして安穏な日をおくってるうちに二人にとって一大事がおこった。」とあるように、幼年期の中は幼馴染の子どもと一緒に小学校に入学することを「一大事」として非常に恐れていたことが分かる。逆に述べれば、幼年期はとても安穏としていてゆったりとした時期であったことが想像される。けれども、出生時には「ことのほか難産」で、出生後も顔面や頭部に腫物があったため、母親と後に養育を担当する伯母の手を煩わせた。伯母は自らの子を病（脳膜炎の一種）で亡くしてしまったこともあり、勘助を特別な愛情を注いだ。勘助も伯母からなかなか離れようとしなかった。その後も養育者として伯母との日々と、ようやく友達と会話ができるようになった時点までが入学前の話となっている。

２．谷崎潤一郎『幼少時代』

この作品は、谷崎自身が自分の生い立ちを最も古い記憶から順に可能な限り詳細に綴りたいという思いで執筆されたものである。また、次のような目的も添えられている。

> これは、一面においては自分の生い立ちの記であると共に、一面においては、現在こんなにも変り果ててしまった東京の、明治中葉頃における下町の情景を、少しは今の若い人々に知って置いてもらうのが目的でもある。

よって、この作品は先ほどの『銀の匙』とは異なり、当時の情景を詳細に述べることで時代性を文章として保存する役割を担っている。晩年の作品とは思えないほど記憶が正確である理由は、はしがきの中で、記憶が不鮮明な個所については当時の記録を辿ったり、親戚や知己の老人、小学校時代の友人らの証言などで補ったりしていると証言している。冒頭にもあるように、最初は４,５歳の幼児期からの記憶について順を追って語られている。彼が幼少期過ごした東京の日本橋界隈についての地理的な情報はもちろんのこと、谷崎家を中心とした当時の人々の様子が克明に描かれている。そして、阪本小学校への入学、尋常科から高等科までのエピソードが綴られている。幼年期については、冒頭部から「阪本小学校」の前半に小岸幼稚園に通っていた時期の話までとなっている。その後も時折、幼児期の話が登場することもあるが、ほぼ時系列で執筆していると思われる。

３．室生犀星『幼年時代』

犀星は、故郷金沢と東京とを往復しながら俳句・詩と文芸活動を展開するが、それらの活動だけでは生計が立たないことを実感し、散文創作に取り掛かる。他の自伝とは異なり、特に幼年期において事実とは異なる描写が散見されることが特徴である。彼が加賀藩の足軽頭であった父親が女中であった母親との間に設けた子どもであったという出生の秘密があったからである。生後まもなく養母のもとに引き取られ、やがて寺の住職の養子となった。事実、犀星は母親の元に行った形跡はない。よって、冒頭部から犀星の創作であるが、実家と養家とを往復する描写を通して、犀星の願望、すなわち生みの親と育ての親との両方への思いが分かちがたく存在したことを示しているという考察もある。11章構成のうち、幼児期については冒頭２章のみである。１章は、先述した通りで、実家での父母の様子、２章は養家における姉との会話で構成されている。

４．堀辰雄『幼年時代』

この作品は、唯一西洋の自伝の伝統文学からの影響を受けたものである。あとがきによると、ハンス・カロッサの『幼年時代』の英訳を入手して興味を持ち感動と共に読了した。カロッサが、序文で「人生の最初の十年間において、われわれの愛したり何かしたりしたのと同じものを、われわれは一生の間、いつも愛したり何かするものだ」と述べていることから、彼のまねをするわけではないが、自分の幼年時代を見直すことにこれまで味わったことのない一種の愉快を感じたとのことである。

構成は、４歳の頃の記憶から始まり、小学校時代の記憶までがエピソードと共に語られている。具体的には、不仲な父母、洪水による転居、幼稚園の記憶などが綴られている。事実を淡々と描き

出すだけでなく、韻文などを引用しながら抒情性を高める工夫が施されているのが特徴である。養育については、母親よりも祖母が担当していたものと思われる。祖母のいるときには祖母と、祖母がいない時には、父親と散歩することを好んだ。お龍ちゃんという女友達と遊ぶことを覚え、母親から紹介されたたかちゃんという女児も交えて遊ぶ姿が描写されている。

５．井上靖『幼き日のこと』

井上には、『しろばんば』『夏草冬濤』、『北の海』などの自伝的小説がある。あとがきによれば、この作品は『しろばんば』が小学生時代を書いた小説であるのに対し、主に七歳以前の様子を記した自伝である。だが、実際には作品後半部のエピソードは小学校入学後のことが多く、『しろばんば』と重複する時期のものもある。旭川での出生、伊豆での祖母との生活が続いている。この祖母は、血のつながった祖母ではなく、曾祖父の妾であった女性である。井上はこの「祖母」に少年期までの養育を担当されることになる。時折、祖父の本宅にも宿泊するという複雑な生活を体験している。「旅情」の章からは、主に小学校入学についての体験が語られているため、この章以前の記述内容が井上の幼年期であるということができる。

６．大岡昇平『幼年』

あとがきによれば、これまで『父』、『母』など、大岡は両親や自分の幼児の回想を書いた短編を綴ってきたが、自分の生い立ちそのものを中心に語っているのはこの作品が最初であるとしている。自分の経験の確認の目的で執筆されていて、自分ばかりを繰り返すことを避け、大正初年の渋谷の風物に自己を埋没させて語っている。記述からは、谷崎の『幼少時代』の流れを汲むものであると考えてよい。それは、描写のみならず、作中に生活圏内の地図、挿絵、そして写真が添えられていることなど表現形式として類似している点が見出せるからである。７章構成のうち、５章「渋谷第一小学校」から、本格的に小学校生活を始めることになるため、この章以前の記述内容が大岡の幼年期が語られた章であるということができる。

Ⅳ.「幼年期」における遊び

以上のように、明治期中期から後期にかけて誕生している作家を並べてみたが、それぞれ作品成立年代、出身地、家族構成特に養育者など作家によって多種多様であるということができる。ただ、いずれの作品も、作者が記憶を手繰り寄せる方法として多少前後しながらもほぼ年代順に綴られているため、就学前の記述を限定することができる。

次に、彼らの幼児期における「遊び」の記述について抜き出して考察する。

１．中の場合

「天気のいい日には伯母さんはアラビアンナイトの化けものみたいに背中にくっついている私を背負いだして年よりの足のつづくかぎり気にいりそうなところをつれてあるく。」p.12

「伯母さんはまた草紙でたんねんにはった皮籠からいろいろなおもちゃをだして遊ばせてくれる。」p.16

「そのほか刀、薙刀、弓、鉄砲など、あらゆる戦道具もそろっていた。伯母さんは私に烏帽子をきせたり、鎧おどしをささせたり、すっかり戦人にしたててから、自分も後ろ鉢巻をし、薙刀をかこんで、長い廊下の両はじを陣どって戦ごっこをする。」p.17

「またおりおりは近所の大日様へつれていって遊ばせた。」p.24

「このへんの子は神田の腕白どもにくらべればさすがにおだやかだし、それに往来は静かだし、私のようなものにとってはまことに屈境な世界であった。で、伯母さんは一所懸命私の遊び仲間によさそうな子供をさがしてくれたが、そのうち見つかったのはお向こうのお国さんという女の子であった。」p.51

中は、５歳ぐらいまで養育者である伯母に依存して始終背負われることで、生活圏内の風景を伯母の背中越しに記憶している。成長するとともに、伯母との会話が交わされるようになり、伯母から昔話を聞き百人一首を習い、伯母とのごっこ遊びが展開される。また、中が虚弱体質であったため、伯母は腕白な男の子より女の子を友だちとして引き合わせる。そして、お国さんという女の子と伯母とで「ひらいたひらいた」、「かくれんぼ」、「わ

らべ歌」、「かごめかごめ」などの遊びを楽しんでいる様子が描写されている。

２．谷崎の場合

「或る晩私が六畳間で弁慶の七つ道具の玩具を背負って遊んでいる最中に、天井から釣ってある石油ランプに突き当って危く火事を出しそうにしたことがあった。」p.45

「私はいつも冬が来ると、裸足で敷松葉の上を踏んで、母屋の庭から離れ屋の庭を行ったり来たりして遊んだ。」p.50

「天気のよい日には、ばあやは私を背中に負ぶって方々の縁日に連れて行ってくれた。」p.50

「浅間神社の祠は、富士山を象った小さな丘の上に建っていたので、子供たちはそれを登ったり下りたりして遊んだ」p.67

「小学校へ上る前に、私は暫く京橋区霊岸嶋の小岸幼稚園という幼稚園へ通ったことがあった。どうしてそこへ通うようになったのか、いつからいつ頃までの間であったか、どうせ長い期間ではなかったと思うけれども、はっきりした記憶は残っていない。」p.78

「その頃の幼稚園では子供にどんなことを教えたのであったか、私が覚えているのは、天長節の日に唱歌を歌ったことと、竹の細い串を豌豆まめに突き刺したものを繋ぎ合せて、三角や四角の立方形を作って遊んだこと、ぐらいである。」p.79

谷崎は、中の場合と同じく養育者である乳母によって育てられている。だが、中の場合と異なり、母親に会えることを心待ちにしている描写が見受けられる。引用に見られるように、遊びの場面は弁慶の七つ道具を振り回して石油ランプをひっくり返して危うく火事となる場面から始められている。その後乳母の背中に負われて縁日に行き、そこで町中の風情を体験する。ただ、子供の仲間には加わらず、あくまでもその光景を眺めていることに終始している。６歳まで弟のまねをして母の乳房を吸っていたことが回想されている。実際に遊びに加わっている描写は小岸幼稚園の入園してからのことである。それでも、幼稚園における遊びも唱歌や制作遊び程度しか記述されていない。幼稚園でも乳母の姿が気になっていたこともある。まだ、集団生活には慣れていなかったということが考えられる。

３．犀星の場合

「私はよく実家へ遊びに行った」p. 7

「長火鉢を隔ってすわって、母と向かい合わせに話すことが好きだった。」p. 7

「父は、すぐ隣の間にいた。しかし昼間はたいがい畑に出ていた。私はよくそこへ行っていた。」p. 8

先述したとおり、実際には実家に行って実父母に会うことはなかったため、以上の記述には多分に作者である犀星の願望が描かれていると考えられる。その後、養家に戻って寝床で姉から加賀藩の昔話を聞きながら眠るといった習慣について記述されている。

４．堀の場合

「私の家の生籬の前に、そこいらの路地の中ではまあ少しばかり廣い空地があつたので、夕方など、よく女の子たちが其處へ連れ立つてきて、輪をつくつては遊んでゐた。」p.120

「或る日、私がさうやつて一人で無花果の木かげで餘念なく遊んでゐると、私の母が何處からか、一人の見かけない女の子を連れて来た。」p.123

「さうやつて三人で遊び合ふやうになつてからだつても、お龍ちゃんはますますその本領を發揮した。しかしおとなしいたかちゃんは私にばかりでなく、さういふ利かん気のお龍ちゃんに對しても、すべて控へ目にしてゐた。そのために殆ど仲違ひもせずに、三人で仲好く遊びつづけてゐられた。」p.125

「最初はさういふ彼女のおせつかいなやり方が、私には小うるさくて、気にいらなかつたが、そのうち不意に、さういふたかちゃんに、これまで自分の母にしつけて来たが、そんなこともいまはちょつと出来にくくなつたやうな幼い日の仕草を再び繰りかへす事に、――さういふ事をもいかにも自然に行はせてくれる二人きりのままごと遊びに、妙な魅力のやうなものを私は感じはじめた。」p.132

堀も最初の友達にお龍ちゃん、その後母親の引

き合わせたたかちゃんといずれも女児と親しくなる。従って、主な遊びはままごとといった類のものになる。その後、幼稚園に通うことになるが、集団生活に馴染めず、すぐに辞めてしまい、一年後小学校入学することになる。

５．井上の場合

「私は戸外で遊んでいて、いつも土蔵の窓の方に眼を遣った。（略）私は祖母がランプに点火するまで戸外で遊んでいた。そして窓に明りがさしてから、土蔵へはいって行った。」p.22

「幼い者は幼い者で、あらしの翌日は忙しかった。（略）その他にもいろいろな楽しみはある。地面に張りついている木の葉を一枚一枚はがして行くことなどは、あらしの翌日だけの遊びである。」p.41

「私が本家の方に遊びに行くように、まさちゃんの方も、時に誰かに連れられて土蔵にやって来、そのまま遊んで行くことがあった。」p.65

祖母に養育されていたものの、意外に祖母と遊んだ思い出については語られていないということが特徴である。この作品の場合は、祖母が本家との複雑な関係により本家との微妙な距離感による歪みに幼いながらも気づいていたとの記述が見られる。

６．大岡の場合

「そこで姉と従姉の信子さんと、なんかして遊んだ記憶がある（二人の記憶の最初である）。そこへ雨が降って来た。すると母が唐傘を持って来た。その傘を開げたまま地面におき、その蔭で遊び続けた。」p.81

「或る日、家の前で一人で遊んでいたら、祖母ゆうがその路地から出て来た。空地に沿った路地は、その路地より一段低くなっていた。」p.81

「路地の前の道は、一〇メートル右へ行くと、幅一メートルぐらいの小路になってしまう。従って左手の下駄屋の角からは、車が入って来ないので、子供のいい遊び場だった。遊びたくなると、門の前から、『ミッちゃん、遊ばない』と声をかける。」p.101

大岡の場合は、姉や従姉などといった年上の子どもと遊びことが主であった。「陣取り」、「メンコ」、「石ケリ」、「はじき出し」などといった具体的な遊びを記憶しているのも、年上の女児たちと遊んだ記憶が鮮明だったと考えられる。

Ⅴ．考察

これらの作品の特徴を表１にまとめると以下のことが明らかになった。

・自伝の執筆時期は、主に30代前後と60歳前後の両時期に分かれる。
・自伝の執筆動機は、作家個人によって異なる。30代前後の場合は韻文から散文への登竜門として書かれたもの、外国文学からの影響で書かれたものなどが挙げられる。60代前後では、円熟期を迎えて自分の生い立ちを整理しておきたいという動機がある。生い立ちの整理の中には、故郷の町の様子を描くことにより読者の郷愁を誘う手法が採られている。
・養育者については、必ずしも母親が養育にあたっていたとはいえない。むしろ、祖母や乳母など既に養育の経験がある、もしくは人生経験豊かな大人が養育にあたっている場合が多い。
・乳幼児期における記憶は、養育者に負ぶわれて生活圏内を散歩することから始まっていることが多い。その後、一人で遊ぶことを覚え、友達同士で遊ぶことへと移行する。友達については、性格的な傾向から男児ではなく女児の特定の友だち姉妹であることが特徴的である。
・遊びについては、記憶の鮮明度によるが、遊びそのものを具体的に挙げているものと遊びそのものにはあまり触れていないものがある。特に、『銀の匙』や堀の『幼年時代』については、質・量とも豊富で具体的である。具体的な描写があるものについては、明治期から遊び続けてきたものである。
・就学前教育については、幼稚園に通っていた作家もいることはいるが、卒園まで通い続けることはなかった。描写を見る限り、集団生活に馴染めず、遊びについても肯定的な評価を下していない。

Ⅵ．終わりに

これまで作家が自らの幼年時代を綴った描写を中心に、彼らの幼年時代がいかなるものであったかを比較検討という形で分析を行った。30代前

表１　近代文学作家の「幼年時代」に関する比較対照表

	中　勘助	谷崎　潤一郎	室生　犀星	堀　辰雄	井上　靖	大岡　昇平
生年	1885	1886	1889	1904	1907	1909
没年	1965	1962	1962	1953	1991	1988
出身地	東京都	東京都	石川県	東京都	北海道	東京都
作品名	『銀の匙』	『幼少時代』	『幼年時代』	『幼年時代』	『幼き日のこと』	『幼年』
出版年	1921	1955	1919	1942	1973	1973
執筆年齢（推定）	36（前編27）	70	30	38	66	64
冒頭文	私の書斎のいろいろながらくた物などいれた本箱の引き出しに昔からひとつの小箱がしまってある。	私は多分それが私の四、五歳の時のことであったろうと思う記憶を、二つ三つ持っている。	私はよく実家に遊びに行った。	私は自分の幼年時代の思ひ出の中から、これまで何度も何度もそれを思ひ出したおかげで、いつか自分の現在の気もちと綯ひ交ぜになつてしまつてゐるやうなものばかりを主として、書いてゆくつもりだ。	私は明治四十年（一九〇七）に北海道の旭川で生れた。	私の少年時代は主に渋谷ですごされた。
幼年期の特徴	伯母が養育を担当していた。素話を聞いて育った。友だちはお国さん。	乳母（ばあや）に育てられる。	養家と実家の往復。（実際ではない）里親に育てられる。	母親と祖母に育てられる。火事に記憶が鮮明に残っている。母親よりも祖母の記憶の方が鮮明。友だちはお龍ちゃん、たかちゃん。	旭川から伊豆へ。養育は母親から祖母に。家庭が複雑で祖母が複数存在する。	養育は母親。
幼年期の遊び	・木の実どち・おもちゃ遊び・百人一首・ひらいたひらいた・かくれんぼ・かごめかごめ	・弁慶の七つ道具の玩具・浅間神社の丘遊び・小岸幼稚園・唱歌・立体形を作る。	・姉との会話。昔話。	・ひらいたひらいた・ままごと・水ピストル・絵草紙・幼稚園（行かなくなる）	・川遊び	・陣取り・石ケリ・はじき出し
執筆動機	詩の創作に断念、屈辱さえ感じながら散文に筆を執るようになって、最初にまとまった作品が『銀の匙』である。	いつか私は自分の生い立の物語を、最も古い記憶から順を追って出来るだけ詳細に綴ってみたいという念願を持っていた。	小説で生活を建ててみようと考えていた。まず、自分の伝記から始めようとした。	ハンス・カロッサの「幼年時代」に感動し、刺激されて自分の幼年時代を見直すことに、一種の愉快を感じるようになった。	自分の幼時を振り返って、その思い出を綴った随想。小説風な書き方をしている。	自己の経験の確認が目的だったが、自分の育った環境である大正初年の渋谷の風物に、自己を埋没させて語るのを旨とした。

後の作品は、いわば出世作のような位置づけであるせいか、事実関係よりも人物やエピソードを記述することで新鮮な印象を与える。だが、60代前後の作品には、作家が開発され失われた街並みの様子をできるだけ忠実に表現して、同世代の読者に共感を求めるような老練な印象がある。いずれの作品にも、人生の基盤となる幼年時代を養育者に見守られながら、遊びを通して近所の友だちと交流する様子が確認できた。

今後は、幼年時代に引き続き、作家たちの少年時代はいかなるものであったかということを同じ６人の少年期を比較することを今後の課題としたい。

＜引用・参考文献＞

使用テキスト
中勘助（1935）『銀の匙』岩波文庫
谷崎潤一郎（1998）『幼少時代』岩波文庫
室生犀星（1952）『或る少女の死まで　他二篇』岩波文庫
堀辰雄（1977）『堀辰雄全集　第二巻』筑摩書房
井上靖（1976）『幼き日のこと　青春放浪』新潮文庫
大岡昇平（1974）『大岡昇平全集　第九巻』中央公論社
自伝評論
佐伯彰一（1991）『日本人の自伝』講談社学術文庫
佐伯彰一（2000）『自伝の名著』（ハンドブックシリーズ）新書館
佐伯彰一（2001）『自伝の世紀』講談社文芸文庫
鹿野政直（1982）『日本人の自伝別巻Ⅱ（全25巻）』（日本人の自伝300選）平凡社
中川久定（1979）『自伝の文学』岩波新書
遊び関連
小川清実（2001）『子どもに伝えたい伝承あそび　起源・魅力とその遊び方』萌文書林
山本駿次朗（1990）『明治のこども遊び』国書刊行会
久富健（1978）「自伝文学論」『和光大学人文学部紀要』13．p.63-68
山田昭夫（1967）「自伝―文学史にない文学史」『国文学解釈と鑑賞』32．p.41-45
長谷川泉（1966）「私小説と自伝」『国文学　解釈と教材の研究』11（３）．p.59-64
鈴木敏夫（1999）「自伝論について」『城西大学人文研究』25（１）p.1-13
和田昭夫（1999）「フランス自伝文学比較研究の試み」『大阪大学文学部研究紀要』39．p.21-53
市川美香子（1991）「アメリカにおける自伝文学研究の動向」『大阪市立大学人文研究』43（８）．p.719-735
山田高之（2001）「自伝で子供時代を描くことについて（その１）ルソーの『告白』第1巻を中心に」『九州女子大学紀要　人文・社会科学編37（３）p.65-78
土屋京子（2011）「『わたし』について語る猫―自伝文学とE.T.Aホフマンの『牝猫ムルの人生観―』」『京都大学文学研究科・文学部研究報告』25．p.43-64